

(提言)「ことばに対する能動的態度を育てる取り組み
—初等中等教育における英語教育の発展のために—」

1 現状及び問題点

1989年以降初等中等教育の英語教育においては、読解重視から実用重視への転換が図られてきた結果、英語でのコミュニケーション能力の育成が主流となっている。

しかし、いったい何が「実用的」なのか。世界中で英語を非母語として話す人は母語として話す人の約2倍なのに、母語話者の話す英語だけを「正しい」英語として教えるのが「実用的」なのか。日本国内で英語を話す需要がほとんどないのに、「コミュニケーション」を最優先することが「実用的」なのか。いずれも確実な根拠が見つからない。

実用重視への転換とともに導入された「英語による英語の授業」にも問題がある。英語のインプットが少なく、母語からの影響も避けられない状況で、限られた時間と空間の中で英語を使ってみても、「英会話ごっこ」に終わってしまうおそれはないか。

実際のことばの使用では、母語であれ非母語であれ、ことばの仕組みの中に組み込まれた分類や捉え方を理解しつつ、ことばを発する際の聞き手や周囲の状況に瞬時に対応することが求められる。こうした能力は、ことばに対する能動的態度があって初めて身につくもので、単語や構文をただ覚えさせるのは、時間と労力の浪費になりかねない。

ことばへの能動的態度は、英語の習得に役立つだけではない。多くの児童・生徒の母語である日本語の仕組みや働きに気づかせるためにも役立つ。さらにそこから、日本語を母語としない人々が日本で直面する言語的困難さへの共感の芽生えも期待できる。

2 提言の内容

(1) 非母語としての英語という視点の共有

わが国の初等中等教育での英語教育が非母語教育である点を十分認識し、実現不可能な過大な目標に代えて、現実的な教育方針を設定するべきである。

(2) 英語でおこなうことを基本としない英語教育への変更

英語教育には、ことばの仕組みや、ことばを発したり理解したりするプロセスに気づかせることにより、ことばに能動的に取り組む態度を育てるための豊かな可能性が内包されている。「英語による英語授業」は、このような可能性を閉ざすことがないよう、日本語による授業との適正なバランスをもって実施されるべきである。

(3) 文字の活用、書きことばの活用

時間や記憶の制約なしにことばの自由な吟味を可能にする文字は、ことばについて考

えさせるために不可欠である。また、書かれた英語の活用には、不足する英語のインプットを補い、児童・生徒の関心に合った情報を提供できる点で、大きな長所がある。かつての読解重視の教育に戻るのではなく、書きことばの新たな活用を考えるべきである。